

「あつまる ぶつかる うまれる」場とコミュニティ経済

富士ゼロックス株式会社 研究技術開発本部 水谷 美由起
 富士ゼロックス株式会社 プロダクションサービス営業本部 三田 真人

1 「R&Dスクエア」は開かれた価値づくりの場

富士ゼロックスは、2010年に分散していた研究開発拠点を集約。様々な領域の研究開発を担当する約4500名が横浜駅から徒歩8分の楕円形の建物、「富士ゼロックスR&Dスクエア」に集まりました。「あつまる ぶつかる うまれる」をキーコンセプトに、人や情報、モノが行き交う都市の持つダイナミズムを体現。パートナー企業、大学・研究機関、そして地域の皆様に開かれた場とすることで、リアルな課題を知り、それにこたえる技術や知識をぶつけ、そこから新しいものを生み出していく。「あつまる ぶつかる うまれる」を実現する未来に向けた場で、これまで以上に実証的で新しい研究開発を行っています。3階のオフィス入口前のスペースには、コラボレーションする場として「お客様共創ラボラトリー」があります。

2 開かれた研究の実践例：JOYokohama

2012年5月、対話技術について開かれた形で研究を行うと、社外有志30名のご協力のもと未来志向の対話セッションを開催しました。この実証的な研究活動が、横浜のコミュニティ経済との出会いでした。

「お客様共創ラボラトリー」にてワールドカフェやペア対話などホールシステムアプローチを駆使し、私たちとして実践し得る最高の未来志向の対話セッションを、土曜日に丸一日かけて行いました。ご参加いただいた方々の前向きで温かい反応に背中を押され、その後は平日夕方から3時間程度のセッションを2回ほど開催しました。この一連の活動を、横浜をもっと楽しもう！（enJOY Yokohama）という思いを込めて「JOYokohama（通称ジョイヨコ）」と名付けました。

大学生を含め様々な年齢、職業のメンバーがジョイヨコに集っていただきました。横浜関内地区の社会企業家さん、地域密着型メディアのライターさん、NPOの方、といった横浜で生活し横浜で仕事もしていてワーキングなど先進的なワークスタイルを実践されている方々と交流が生まれました。また、横浜市会や市役所の方たちとお話する機会が生まれました。

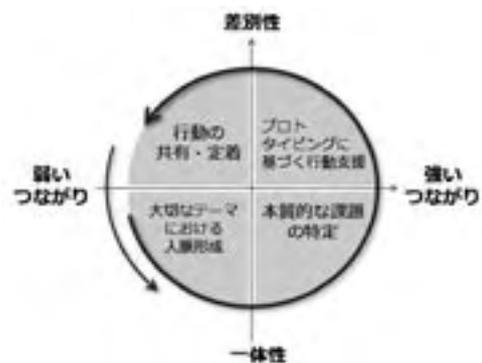
研究を担当する者として、多くの人に興味を寄せていただけることほどうれしいことはありません。しかも、対話技術について実証的に研究が進み、経験が蓄積でき、当日のアンケートや事後インタビューなどにより仮説検証を行うための材料を得ることができました。

そして何よりも、地域の皆さんとのゆるやかなつながりが生まれました。今回こうしてコラムを書いているのも、そうして生まれたつながりの文脈の中にあります。

3 研究内容：未来志向の対話プロセス

富士ゼロックスは「人と人とのよりよい相互理解のためのコミュニケーションを提供すること」を企業哲学としています。今、「人と人との相互理解を促す」ために

最も大切なのは「同じ目線で話す」ための場や方法を提供する事で感性的な理解を助けることだと考えています。方法としては、テーマの差別性や参加者間のつながりの強さによって下図の4つのタイプの未来志向の対話セッションを設計し、複数回のセッションにより構成された一連のプロセスを考案しています。このプロセスにそって対話を重ねる事により、所属組織における立場や日常の人間関係による影響を保留し共通な課題認識を導き、課題解決に向けた行動に結びつけます。ジョイヨコはこのような対話技術についての実証的な研究活動の一つです。



未来志向の対話セッションの全体イメージ

4 対話技術×開かれた場×コミュニティ経済

対話技術について実証的な研究活動を行った結果、横浜のコミュニティ経済との出会いがありました。そしてこのご縁から、横浜オープンデータソリューション発展委員会キックオフイベントでのコラボレーションが生まれました。80名以上の多様なメンバーが「お客様共創ラボラトリー」に集い、対話によって未来を紡ぎ出そうとする。わくわくするとともに、プロセスや成果のより実践的な共有化に向け、新たなエコシステムを地域の皆様と共に創っていきたく、感じました。

